

現代ペルシア語の謙讓語「bande¹⁾: بنده →私奴；小生」 の語根をめぐって

～奴隸・召使から単数一人称の謙讓語への変化～

Azarparand, Sohrab

1. はじめに

偶然にも語学好きであったイギリス人法律家・文献学者ジョーンズ(William Jones)が1786年に初めてサンスクリット語・ギリシア語・ラテン語などの間に密接な関係があることに気づき、これらの言語は恐らくもはや存在しない共通の祖語(proto-language/parent language)から派生しただろうと指摘した。後にこの発言は比較言語学・比較文法(comparative linguistics)という形で言語学の出発点となったという話は言語学の世界で有名である(風間 1978:15-22)。その後の様々な比較言語学の研究のなかで、インド・ヨーロッパ語族(以下、印欧語族)には数多くの共通の語彙・文法構造が存在することが次々と証明されてきた。このような共通点は印欧語族の祖語と思われる言語からの派生に従って次第にその共通性が薄れ、移住・征服など様々な原因で長い年月の間に音韻・文法・意味などに変化・ギャップが生じたと考えられる(家村田 1975:186-216)。²⁾そして今後もまた同様な要因あるいは他言語語族との接触で、印欧語族の個々の言語それぞれが変化し、音韻・文法・意味などの観点からそのギャップがより大きくなっていくと言っても過言ではない。

本論ではそのような変化の典型的な例の一つとして、印欧語族のほとんどの言語では、繩・足枷・紐という意味で用いられ、印欧語族としての現代ペルシア語でも、そのような意味を保ちつつ、「bande:私奴；小生」という形で新たなニュアンスが加えられた語彙「band」が辿ってきた運命に関して、中心的に言及したい。この極めて印欧語族的な語彙は謙讓語にニュアンスを変更した後に現代ペルシア語を経由し、やがて同様な印欧語族のヒンディー語・ウルドゥー語及び他言語語族のアルタイ諸語のチュルク語派にまで単数一人称の謙讓語などの意味で用いられるようになるという非常に長い歴史を有する語彙である。

2. インド・イラン語派

印欧語族には12語派に及ぶ語派が属しており、語派によりまた、それぞれ多くの言語から成っていると考えられる。印欧語族の主要な語派のひとつは、インド・イラン語派(Indo-Iranian)と呼ばれ、それはまた基本的に以下の3つの語派に分けられる。³⁾

表1. インド・イラン語派

(Indo-Iranian)	1.インド語派 (Indic)
	2.ヌーリスターン語 (Nūristānī→かつての Kāfirī)
	3.イラン語派 (Iranian)

3. イラン系諸言語とペルシア語

本論の話題に入る前にまず、いわゆるイラン語派とそのなかのペルシア語の位置づけに関して簡潔にまとめる必要があろう。現在のイランの共通語は現代ペルシア語と呼ばれる言語である。現代ペルシア語をアラビア文字で表記することや、その使用地域が中東であることから、ペルシア語といわゆるセム語派(Semitic)のアラビア語が非常に似ているという誤解が一般人の間には多い。しかし、前述のようにペルシア語は、印欧語族のインド・イラン語派に属しており、アラビア語からの数多くの語彙・アラビア語表記が借用されているものの、アラビア語とは本質的に異なる言語である。例えていうと、日本語には数多くの漢語が借用されており、中国語と漢字という共通の表記を用いるが、中国語とは、語族も異なるし、言語自体も通じることはないのと同じである。

さて、ペルシア語を含むイラン語派は歴史的に三つの古期・中期・新期、そして地理的に西部方言と東部方言の二つに分けられる。この二つの観点からイラン語派を分類すれば、以下のような表にまとめることができる。(表2は Yarshater (1957:9-25), 上岡 (1989:669-689), Windsurf (2005)に基づき、筆者が作成したものである。)

表 2. イラン系諸語

(Iranian)	古期	西部方言	①古代ペルシア語(Old Persian)②メディア語(Median)
		東部方言	①アヴェスター語(Avestan)②スキタイ語(Scythian)
	中期	西部方言	①中世ペルシア語・パフラヴィー語(Middle Persian/Pahlavi) ②パルティア語(Parthian)
		東部方言	①ソグド語(Sogdian) ②ホータン・コータン語 (khotanese) / サカ語(Saka)③ バクトリア語(Bactrian)④ホラズム(Khwarezmian)
	新期	西部方言	①現代ペルシア語(New Persian/Fārsi)②タージーク語(Tajik)③ダリー語(Dari) ③カーブル語(Kābuli)④中央方言群(Central dialects)⇒(ギャブリー語(Gabri)・ ヤズド語(Yazdī), ケルマン語(Kermāni), シーヴァンド語(Sivandīなど) ⑤セ ムナーン語(Semnāni)⑥カスピ海南岸方言(Caspian dialects)⇒(マーザンダラ ン語(Māzandarāni), ギーラーン語(Gilaki)⑦ターレシュ語(Tāleshī)⑧タート語 (Tāti)⑨ファールス方言群(Fārs dialects)⑩ラーレスタン語(Lārestāni)⑪クム ザール語(Kumzāri)⑫ロル語/ルル語(Lori) ⑬クルド語(Kurdish)⑭グーラーニ ー語(Gūrāni)⑮ザーザー語(Zāzā)⑯バルーチー語(Balūchī)⑰パーシュキルド語 (Bāshkirdī)
		東部方言	①オセッティ語(Ossetic)②ヤグヌービー語(Yagnōbi)③パミール諸語(Pamīr dialects)⇒(シュグナン語群(Shughni), ヤズグルアミー語(Yāzgulāmi), ワヒ ー語(Wakhi), サリコーリー語(Sariqōri), イシュカーシミー語(Eškāsmi), サ ングリーチー(Sanglīči), ゼバキー(Zebaki), モンジー(Monji)など) ④バラーチ ー語(Parāchi)⑤オールムリー語(Örmuri)⑥パシュトー語(Pashtō)⑦イロン語 (Iron)⑧ディゴル語(Digor)

上述の表からも明らかなように、数多くのイラン系諸言語のなかでは「ペルシア語(灰色で示した)」という名の言語は、このほぼ三千年の間に三つの①古代ペルシア語②中世ペルシア語(パフラヴィー語とも)そして③近世/現代ペルシア語に発展してきた。現代ペルシア語は中世ペルシア語から多大な影響を受けており、その後継者であると言っても過言ではないが、古代ペルシア語とはわずかな語彙レベルでの共通点を除けば、ことに文法構造など完全に変化してきており、もはや異なる言語同士になっているのである。

いずれにせよ、ペルシア語という名の言語は様々な文法構造・音韻的な変化を経て、数多くのアラビア語語彙を借用している現在もなお、印欧語族的な特徴を多く保持している。

4. 印欧語族における「band」

現代ペルシア語の口語・文章語では、私奴・小生、(神の) 奴隷という意味の *bande* の使用頻度が非常に高い。この語彙のメイン部分である *band* は極めて印欧語族的な性格を有すると考えられる。現代ペルシア語で謙讓語として頻繁な使用を誇るこの語彙は、「*band* (枷, 縄, 紐)+ 関連を表す接尾辞 *e(h)* → بند + .」から構成されている。以下にこの語彙のメイン部分 *band*(بند) に焦点を絞り、詳しく述べることにする。

事実、この語彙は同様な意味で他の多くの印欧語族にもみかける共通の語彙である。次の表 3 に挙げる印欧語族の個々の言語のすべてでは、*band* にあたる語彙は例外なく①名詞として、縄・紐・ベルト・枷・絆・団結・党・バンドなどあるいは、②動詞として縛る・結ぶ・締めるなどそのような意味と何らかの関係を示したり、または③足枷がかけられたことから複語語彙として、質人・使用人・奴隷の意味を表したりすることに注目したい。現代ペルシア語においても、この語彙は時代の流れと共に個々の印欧語族の言語とすべての共通の意味を保ちつつ、質人・使用人・奴隷の意味から謙讓のニュアンスを新たにもつように至ったと考えられる。表 3 では印欧語族で現代ペルシア語の *band* と同様な語源があるとみられる事例を並べてみた。以下の表に記述した内容が個々の言語の適切な辞典あるいは、英語の語彙索引に非常に便利であり、印欧語族の辞典を巻末につけられた英英辞典 Soukhanov(1992:143, 144, 215, 2097)に基づいたものである。(表 3 では、それぞれの古期・中期・新时期言語がアルファベット順に並べられているのみであり、他に特に何かを指すわけではない。)

表 3. 印欧語族における「band」

時期	言語	名詞 (縄・枷・紐)	動詞 (縛る・結ぶ・締める)	主な関連語及び出典 (語彙によって使用人・奴隷の意味を表すことに注意)
古期言語	Avestan (Old Iranian)	banda-	band-	(Bahrami 1990:1014)
	Germanic	bund-/band-	bindan/bintan	(Watkins 1992:2097)
	Old English	bend	bindan/bendan	hūs bōnda(husband) (Watkins 1992:2097)
	Old French	bende		(Watkins 1992:2097)
	Old Greek	なし	なし	なし
	Old Latin	なし	なし	なし
	Old Norse	band-		hūs bōndi(husband) (Watkins 1992:2097)
	Old Persian	bandaka-		(Dekhoda 1957:318)

	Sanskrit	bandhaḥ/ bandhakaḥ	bandh	baddha(鎖のついた；結ばれた；捕まえられた)、 bandiḥ(捕虜；束縛)、bandhanam(結びつけること；捕縛)、bandhuḥ(関係；親戚)、bhrtyaḥ(召使い； 奴隸)(中島 1999:262, 263, 265, 277)
中期 言語	Gothic	bandi	bindan/ga-bindan	bandi(縛るもの(紐、縄、鎖、枷など)；束縛；監 禁；困われの身)、bandja(囚人)(千種 1997:93-4)
	Middle English	bōnd / bānd	bīnden	bondaḡe(bandage など)、hous-bond(husband な ど)、bōndeship(bondage;servitude など)、 bōnde-wōmman(a female serf or servant)など多 い。(Hans 1963:1039-44)
	Middle Persian	band	band-/bastan	bandag(使用人；召使)(MacKenzie 1971:17)
	Parthian	bnd	bnd-/bnyšn	bnbyd(看守)、bndg(召使；奴隸)、bndyst'n(刑務 所)、bng(召使；奴隸)、bndgyft(隷属の境遇)など。 (Boyce 1977:27)
新期 言語	Dutch	band	binden	bündel(包み；荷物；束)、binde/verband(包帯)、 bund(結びつき；結束；同盟)、bürde(重い荷物； 重荷)、bundes(連邦)など多い。 (国松 1985:226-227, 419)
	English	band/bond	(to) bind	bundle(包み)、ribbon(リボン)、bandage(包帯； 絆)、bonds man/woman(奴隸；使用人)、bond servant(奴隸)、bond maid(未婚の女奴隸)、 binding(製本のとじ糸)、surety bond(保証書)な ど。(Soukhanov 1992)
	French	bande	Lier bander(包帯する)	bandage(包帯をすること)、bandeau(細い布；鉢 巻)、bander(～に対して団結する・結束する)、 en bande(一団となって；隊を組んで)など。 (伊吹 1981:234-235)
	Modern Greek	なし	なし	なし
	Hindi (Sindhi)	band	bandhuāi	bande(下僕；信差者；奴隸)、bandegī(奴隸；巨下 などとして服従すること；祈禱)、bande zāde(愚 息；豚児)bandixāne(刑務所；牢獄)、bandhini(女 奴隸；奴隸)、bandhvāi(置；監禁状態)、 bandhuā(捕虜；奴隸)(古賀 2005:909-910)
Italian	banda	attaccare legare	bandeau(小さな紐)、bandista(奴隸；使用人)、 banda(義勇軍；ゲリラ隊)、bàndolo(かせ糸の糸	

		stringere bendare(包帯する)	口；端緒)、bandinella(ローラ式タオル)など多い。 (池田廉 1983:169-70)
Persian (Farsi)	band	bastan	baste(包み)、bandbaz(網渡り芸人；軽業師)、band andāxtan(顔・手足のうぶ毛を糸で抜くこ と)bandegi(奴隷の身分)、bande(奴隷；下僕)、 bande zade(愚息；わが子)、bandi(捕虜；囚人)、 āb.band(ダム)など多い。(黒柳 2002:233)
Swedish	band	binda	bunt(包み)、bandage(包帯)、bandhund(鎖； ひもにつながれた番犬)、banderol(帯封；帯紙)な ど。(尾崎 1990:28)
Portuguese	banda	atar/apertar(結ぶ) amarrar(紐・縄でくく る)、apertar(締める； 閉める)	bando(群れ；一党派；一隊)、bandola(弾薬帯)、 bandurra(ギターに似た昔の楽器)など。 (池上 1996:152-153)
Rumanian	bântă/benti	legă/~g(縛る) stringe/~g(締める) împleti/~tesc(結ぶ)	bândă(楽団)、bândă /benzi(ベルト；テープ)、 bandaje(包帯をする)など。(直野 1984:23)
Spanish	banda	band-una	banda del ventilador(= fan belt:ファン・ベルト)、 bandada(群れ；グループ)など。 (Beatriz 2003:92-93)

上述の表にまとめたように、イラン系諸言語に属するアヴェスター語(Avestan)・古代ペルシア語(Old Persian)・パルティア語(Parthian)・中世ペルシア語(Pahlavi, 以降パフラヴィー語)・現代ペルシア語(New Persian)の「banda-/bandaka-/bnd/band: 縄・枷・紐」にあたる語彙は、古期、中期印欧語族のほとんどでは縄、枷、団結など、という共通の意味を有する。さらに、その同様な語根に由来すると考えられる動詞もまた表3に記したように、ほとんどの場合「縛る、締める、結ぶ」を意味する。

Watkins(1992:2097)または Drosdowski(2001:67,96,120)によると、その印欧語根が「*bhendh-」(本論では、引用部分も含め*は印欧祖語における再建形・推定形を意味する)である。表3で挙げた個々の言語のなかでは、印欧祖語の語彙と推定される「*bhendh-」に最も近い語形をしているのはサンスクリット語の動詞「bandh」あるいは名詞の「bandhaḥ」である。ただし一方で、印欧語における語彙の起源を探る際など、比較言語学において常に重要な役割を果たす古典ギリシア語(現代ギリシア語も同様であるが、ここでは割愛する)と古典ラテン語の場合では*bhendh-/band/bond に似た何らの語彙も見当たらない。紐・縄・枷や縛る・結ぶ・奴隷に関して例えば、古典ギリシア語・古典ラテ

ン語において、以下のような語彙が挙げられる。

- ◆ 古典ギリシア語 (古川 1997)
 - skhoiníon (σχοίνιον: 綱; 紐; 繩; ロープ) p.1065.
 - alysis(άλυσις: 鎖) p.55.
 - aikhmálōtos(αἰχμάλωτος: 捕虜になった; 捕虜; 女奴隸) p.35.
 - dēsmeiō(δέσμεω: 縛る; 枷にかける; 罾にかける; 束ねる)p.246.
- ◆ 古典ラテン語 (國原 2005)
 - resist (なわ; 綱; ひも; ダンス用のひもなど)p.653.
 - ligāmen (しばるもの; ひも; 帯; 包帯)p.426.
 - linea (あま糸; ひも; 綱; なわ; 首飾りなど)p.427.
 - compēs (足を縛る鎖; 綱; 足枷)p.130.
 - catēna (鎖; 手かせ; 足かせ; 絆; 束縛; 監禁など)p.98.
 - famula (女中; 女奴隸; 神々の奉仕者)p.275.
 - famulus (召使い; 奴隸など)p.275.

一方、表 3 に挙げている印欧語族において、インド・イラン語派諸言語やゲルマン語派諸言語とは対照的にフランス語・イタリア語・ポルトガル語・ルーマニア語・スペイン語いわゆるロマンス語派諸言語には名詞・複語語彙としての「band/bund」が多く存在しているものの、縛る・結ぶなど band を語根に作成された動詞が全く存在していないかまたはあるとしても、イタリア語「bendare」・フランス語「bander」のように「包帯する」とどめている。ロマンス語派諸言語のこのような特徴や*bhendh-/band-/bund に似た何らの語彙も古典ラテン語に存在していないことから、ロマンス語派においては band/bund を語根にする語彙はゲルマン語からの借用語である蓋然性が高い。

4.1. 印欧祖語の*bhendh-から現代ペルシア語の bande まで

印欧祖語の*bhendh-とゲルマン語派の band・bund の子音の対応は、比較言語学において有名なグリムの法則の第一次子音推移 (First Consonant Shift) で説明される (桜井 1972:12-17) 及び (川島 1994:531-533)。また、印欧祖語の*bhendh-に最も近い語形をしているインド語派のサンスクリット語の bandhaḥ (名詞)・bandh (動詞) とイラン語派において最も古いとされるアヴェスター語の banda- (名詞)・band- (動詞) の間にみられる音声変化に関して、例えば「閉鎖音の特徴としては、インド語派との最大の相違として、帯気音の消失があげられる。すなわち、有声帯気音 bh, dh, gh は完全に有声無気音 b, d, g に合流し、無声帯気音 ph, th, kh は摩擦音化 (f, θ, x) する。ただし、無声無気音 p, t, k も他の子音の直前で同様に f, θ, x に変化する…」というように説明されている (熊本 1989:123)。一方、イラン語派一古いとされるアヴェスター語の有声無気音の b, d と印欧祖語の有声帯気音*bh, *dh の対応に関しても、Roger (2004:749)による説明がある。以上のような通説をまとめると、印欧祖語・インド語派の bh, dh はイラン語派に b, d に変化したことになる。従って、印欧祖語の*bhendh-・サンスクリット語の bandhaḥ/bandh がイ

ラン語派では *banda*・*band*・(アヴェスター語)/*bnd* (バルティア語) /*band* (パフラヴィー語・現代ペルシア語) に変化したと言える。

他方、意味に関しては、表 3(p.5)に挙げたようにサンスクリット語の *baddha*(鎖のついた; 結ばれた; 捕まえられた), *bhṛtyaḥ*(召使い; 奴隷)など、中世英語の *bondāge*(*bandage*), *bōnde-wōmman* (a female serf or servant ;*bondwoman*)など及び現代英語では *bond man/woman*(奴隷, 使用人), *bond servant*(奴隷), *bond maid*(未婚の女奴隷), *bondsman*(奴隷, 保証人)などを例としてみても, *band* の複語語彙として「奴隷・使用人・質人」という共通の意味が存在する。パフラヴィー語においても *bandag*/*bandak*⁵⁾は *servant* のみを意味する(MacKenzie 1971:17,32)。このように, **bhendh*・*band*/*bond*(紐・縄・枷)を基にしたこれらの語彙の背景には恐らく「足枷をかけられた/縄・紐で縛られた」というニュアンスが存在する可能性が高い。⁶⁾

一方、前述の言語とは対照的に現代ペルシア語の *bande* は、共通の意味の「奴隷・使用人・召使」のニュアンスを保ちつつ、「神の創造物・神の奴隷・奴隷・私奴・小生」という新たなニュアンスをもつように至ったのである。恐らく「神の創造物・神の奴隷」や「自分が奴隷如く縛られた者であり、物事を決めるのはあなた(話し手)だ」のような意味から謙譲の単数一人称代名詞を指す「私奴・小生・下僕」という新たな意味が加えられたと推測できる。イランにおいては、このような意味がペルシアへのアラブ侵入後すなわち、イスラーム侵入後(ササン朝滅亡の651年ごろ以降)に加えられたと考えられる。ただし、ササン朝の公用語だったパフラヴィー語の *bandag*/*bandak* が果たしていつ頃から現代ペルシア語の *bande* に変化し、その意味は奴隷・使用人以外に謙譲語のニュアンスを持つに至ったかは、正確には追究できないと思われる。その理由はいわゆる「沈黙の2世紀」と呼ばれる時期にあると言えよう。

4.2. 「沈黙の2世紀」

表2にもあったようにイラン語派において、ペルシア語という言語は大きく三つの古代・中世・近世/現代ペルシア語に分類される。近世・現代ペルシア語の間には顕著な相違が存在しないため便宜上、以降近世ペルシア語も単に現代ペルシア語とのみ書くことにする。

簡潔に言えば、古代ペルシア語はアケメネス朝(Achaemenes, 前550年~前331年)の宮廷言語として用いられており、キュロス大王、ダリウス大王あるいはその子セルセセスなどのアケメネス朝の諸王が碑文をこの言語で残している(上岡1989:1708-14)。今現在でもペルセポリスなど当時の遺跡にそれらの碑文をみることができる。古代ペルシア語はやがて、時代の変遷に従い、様々な原因で死語(*dead language*)になって行くのであるが、最も重大な打撃を与えたのはアレクサンダー大王によるアケメネス朝の滅亡であると言われる。その後、バルティア帝国(*parthia*・アルサク朝/*Arsaces*, 前238頃~降226)とササン朝ペルシア(*Sassanid*, 224年~651年)では、正式な言語はパフラヴィー語となる。パフラヴィー

一語は、必ずしも古代ペルシア語碑文の言語を受け継ぐものではなく、格・語尾変化などを受けており、古代ペルシア語より単純な文法構造を持っていたとみられる。古代ペルシア語同様に長期に亘って使用されていたパフラヴィー語も七世紀半ばまで公用語として用いられたが、次第に死語になっていく運命であった（Roger 2004:764-776）。その要因にはペルシアにおけるアラブ側の征服が最も重要であったと考えられる。

ほぼ10年間かけた戦鬪の末(642年～651年)ペルシア全土がアラブの完全な支配を受けた。この支配は2世紀に亘って続き、ペルシア民族の独立は失われた。「沈黙の2世紀」とよばれる期間は、この200年間を指す(Zarrinküb 1951)。いずれにせよ、ササン朝の公用語として長く用いられたパフラヴィー語は支配者の言語すなわちアラビア語に地位を奪われた以降、主に少数となっていたゾロアスター教の宗教語として使用されたのみで、漸次死語となった。

一方、それとは対照的に公用語の地位を確立しつつあったアラビア語は、科学・文化・宗教さらに文学など様々な分野で特にイラン人知識人の間にかつて例をみないほど用いられるようになった。こうして、ペルシアの直接支配は2世紀に亘って続き、本来の中世ペルシア語に代わり、アラビア語は文章語として使用されるようになった。⁷⁾

しかし、公用語のパフラヴィー語は、ほとんど用いられなくなり、その立場をアラビア語に奪われても、当時の口語であったダリー語（現在アフガニスタンの公用語の一つであるダリー語もイラン語派に属するが、これは沈黙の2世紀のダリー語とは異なる言語である。）はアラブ支配後も庶民の間に用いられ続けた。本来、ダリー語とパフラヴィー語は同じであるが、ササン朝の公用語はパフラヴィー語で、主に宗教、行政、文学で書き言葉として使用されていたのに対して、日常会話ではダリー語が用いられていたと言われる。最初は、双方の言語の間にさほどの差異がなかったが、ササン朝末期になると日常会話が非常に発展し、文章語で用いられたパフラヴィー語とダリー語との相違がより大きくなったため、両言語を区別するために口語をダリー語と名付けたと言われる。ダリー語は、新しい変化に適応しつつペルシア各地域の言語・方言から数多くの語彙を借用し、ササン朝崩壊以降もなおより口語として幅を拡げ、用いられるようになった。ダリー語はこうして生き延びたが、その表記は全く別の記号、すなわち本来のパフラヴィー文字からアラビア文字に変化した。ダリー語においては個々の変化のなかでもこれが恐らく最も大きな変化であると言えよう。なぜダリー語の表記がパフラヴィー文字からアラビア文字に変化したのかに関して、様々な要因があると考えられている。イスラーム化が広がるに従い、アラビア語・聖典コーランからの多くの借用語をそのまま採り入れることの便宜さもある一方で、当時のペルシアの知識人がアラビア文字になれており、それを使いこなしていたことや、パフラヴィー文字の難解さ・煩雑さが最も重要な要因として採り上げられている。このような変化を経た口語のダリー語はやがて書き言葉として文字で表記されるようになり、さらに文語の現代ペルシア語として位置を固めたのである。以降、現在に至るまで現代ペルシア語はアラビア文字で表記されつづけてきた。

ちなみに本来、ペルシア語の名はイラン南西部に位置している、ペルシア帝国の故地 Pārs/Fārs (古代ペルシア語 *pareava*) に由来しており、現在でもイランでは国語の現代ペルシア語を Pārsi/Fārsi (ファールスィー) という。しかし、10世紀・11世紀の文献では、現代ペルシア語はしばしば、ダリー (*darī*)、パールスィー・エ・ダリー (*pārsi'e darī*)、パフラヴィー (*pahlavi*) と呼ばれていた。

さて、ほぼ2世紀間パフラヴィー語は文語として立場を奪われており、ダリー語も口語として用いられたのみであったのは前述の通りである。このような理由で正確にいつからパフラヴィー語の *bandag/bandak* が現代ペルシア語の *bande* に変化し、その意味も「奴隷・使用人」以外に謙譲語のニュアンスを持つに至ったかを正しく追究できないと思われる。しかし、パフラヴィー語と異なり、*bande* は神の奴隷という意味になるなど、恐らくイスラームからの何らかの影響で、沈黙の2世紀の間に初めてこのような意味になったと推測できる。そして次第にその意味「奴隷、使用人、神の奴隷」から、一人称単数の謙譲語として用いられるようになったと考えられる。ペルシア語の国語辞典のなかでは、信頼度の高い辞典として知られている『*Loghat Nāmeḥ*: لغت نامه』で *bande* を調べると、「使用人、召使、従順な召使、正直な使用人、完璧な人間、選択された人間、神の奴隷、人間一般」のような意味があり、個々の意味に関する事例も様々な文献から挙げられている(そのほとんどが有名な詩集から引用されている)。そして最後の意味として「私奴、こちら、一人称単数の謙譲語」も記されている。「最初では、*'in bande* (この奴隷/この使用人) あるいは、*man bande* (奴隷の私/使用人の私) の形で用いられていたようであるが、後に省略されており、*bande*(私奴、小生) という意味で使用されるようになったようである」というのは『*Loghat Nāmeḥ*』の説明である(Dehkhodā 1957:318-319)。ちなみにアラビア語において、*'abdollāh* (神の奴隷: عبدالله), *qolām* (奴隷; 使用人: قلام) という意味になり、人名としてイランも含めイスラーム諸国で頻繁に耳にする名前ではあるが、いずれの場合も謙譲語の単数一人称代名詞として用いられることはない。

4.3. 『シャー・ナーメ』に現れる *bande*

上述の沈黙の2世紀の直後に現代ペルシア語として現れたいくつかの作品がある。なかで最も有名なのは、25年~30年かけて、1010年頃に完成したとみられるフィルダウシーによる『シャー・ナーメ(王書)』である。『シャー・ナーメ』の主な特徴は次の三つであると言われる。①イラン民族の最大の英雄叙事詩集である。②アラビア語語彙を最小限にとどめている作品として有名である。③量・質の双方点からみて、ペルシア文学・韻文の最高作品である(黒柳 1969:423-47)。

アラビア語語彙は、既に数多く現代ペルシア語に借用されていた沈黙の2世紀後、『シャー・ナーメ』は、意図的にアラビア語語彙を最小限にとどめていることは、言語学的な観点から重要な特徴である。また、イラン民族の文化・慣習・他民族との商売・戦闘、あるいは本来のイラン人の名前、衣服・食文化・楽器・戦闘で使われていた武器名などを

その広範な内容に写し出されていることも当時のイランの社会・文化などを知るにも役立つ。このため、いろいろな意味で貴重な資料になっているのみではなく、中世以来いくども、祖国を異民族に支配されたイラン人は、常に限りなく『シャー・ナーメ』に愛国心を抱くのである。現在でも、イランの教育システムにおいて小学校から『シャー・ナーメ』の有名な台詞が国語教科書に引用されたり、イスラーム教に対して敬虔でない人々が子供に名を付ける際アラブ・イスラーム的な名前ではなく『シャー・ナーメ』に現れる本来のイラン的な名前を参照したりするなどからも、その重要性がわかる。このような特徴を有する『シャー・ナーメ』に *bande* の現れ様を5巻から成っている *Khaleghi-Motlagh, Jalal* (版) (1988) (以下 *Khaleghi* と略す) に検討した。

この版の『シャー・ナーメ』においては、ほぼ47回に亘って *bande* が現れる(第1巻→13回, 第2巻→7回, 第3巻→4回, 第4巻→5回, 第5巻→18回)。そのうち43回は「使用人・奴隸・目下の人物・神の創造物」という意味で使用されている。「私奴・小生」の意味すなわち単数一人称代名詞の謙讓語として用いられるのはわずか4回だが、非常に注目すべき用例である。なぜならば前述したように、**bhendh-/band/bond*(紐・繩・枷)を基にした多くの印欧語族の複語語彙において、これらの語彙は「使用人・奴隸・召使」を意味するのに対して、ここでは同様な語源を有する現代ペルシア語の *bande* はそのような共通の意味を保ちつつ、初めて「神の奴隸・神の創造物・私奴・小生」のニュアンスとして現れるからである。ここでは、*bande* は謙讓語の意味として現れるその4つの詩句をまず引用する。⁸⁾

(本論の最後まで引用する詩句の翻字を最初に記し、原文のペルシア語表記を記してから、日本語での意味を記述する。ローマ字の翻字を左から、そしてペルシア語表記を右から記す。ちなみに、ペルシア語のクラシカルな詩において詩風により特別な音韻が存在するが、『シャー・ナーメ』の詩風は頌詩であり、各詩句の最後に音韻が保たれている。また『シャー・ナーメ』全体に詩句と詩句の間にスペースが置かれている。)

(1) *ma rīn biḡonah rā to andar pazīr* 'az īn bar šodan *bande* rā dast gīr

(*Khaleghi*(版) 1988:No.1.p.171)

مر این بی گنه را تو اندر بندیر / از این بر شدن بندِه را دست گیر

(筆者訳→あなたの上の立場から下僕を助けなさせて、この無罪の者を受け入れなさい。)

(2) *be rahmat barāfrāz īn bande rā* be man bāzde pūr-e āfkande rā

(*Khaleghi*(版) 1988:No.1.p. 171)

برحمت بر افراز این بندِه را / بمن بازده پور افکنده را

(筆者訳→あなたの慈悲で下僕に榮譽を与えなさい。倒した私の息子を我に戻しなさい。)

(3) *man īnak be piš-e to estāde'am* tan-e *bande* xašm-e to rā dāde'am

(Khaleghi(版) 1988:No.1.p. 230)

من اینک به پیش تو استاده ام تن بنده خشم تو را داده ام

(筆者訳→今我はあなたのそばに立っている。私奴の体をあなたの怒りに任せている。)(4) agar mast šod bande az bihoši
sazad gar bebaxši gonāh-e marānemūd andar ān bihoši sarkeši
konī tāze ā'in-o rāh-e marā

(Khaleghi(版) 1988:No.5.p.449)

که گر مست شد بنده از بیهشی نمود اندر آن بیهشی سرکشی
سزد گر ببخشی گناه مرا کنی تازه آیین و راه مرا(筆者訳→もしも私奴は酔ってしまい、知恵をなくし、そのような状況で不順を起こしたならば、我の罪を許し、我の道徳としきたりを直しても相応しいのであろう。)

Khaleghi 版の『シャー・ナーメ』において *bande* は上述の 4 つの詩句のみにおいて、単数一人称代名詞の謙讓語として用いられている。**bhendh-/band/bond* などを基にした印欧語族諸語の多くの複語彙でみてきたような「奴隸・召使・使用人」の意味ではなく、同様な語根をもつ *bande* は、『シャー・ナーメ』のこの 4 つの詩句で初めて「私奴・小生」言わば、謙讓語の用法として用いられている。当時から残された信頼度の高い作品の中では『シャー・ナーメ』のその古さから考えて、単数一人称代名詞の謙讓語の用法としてこれは初めてであろう。また、謙讓語の用法として使用される 4 回すべては①詩の中で会話形が行われている際用いられている。②王など社会的身分の高い人物が話し相手になる際用いられている。沈黙の 2 世紀に日常会話でその用法が始まり、後に書き言葉にも使用されるようになったと推測できる。印欧祖語から始まり、このようなプロセスを経て誕生した単数一人称の謙讓語 *bande* は現代ペルシア語の口語・文語の双方において、最も用いられる一人称代名詞の謙讓語である。

以下『シャー・ナーメ』に「使用人・奴隸・召使」の意味として用いられている 43 回の *bande* の事例を三つ挙げる。

(1) yekāyek 'az ū baxt bargaste šod be dast-e yeki bandebar košte šod

(Khaleghi(版) 1988:Nol.1.p.13)

یکایک ازو بخت بر گشته شد به دست یکی بنده بر کشته شد

(筆者訳→次から次へと不運になり、一人の使用人の手で殺害された)(2) zamān o zamān piš-e man bande šod jahānī be ganj-e man āgande šod

(Khaleghi(版) 1988:No.3.249)

زمین و زمان پیش من بنده شد جهانی به گنج من آگنده شد

(筆者訳→時期も土地も私の奴隸となり、世の中は私の富でいっぱいとなった。)(3) hame šahr-e Īrān bedū zende'and agar šahryārando gar bande'and

(Khaleghi(版) 1988:No.5.p.310)

همه شهر ايران بدو زنده اند اگر شهر بارند و گر بندِه اند

(筆者訳→イランのすべての町(の人々)が彼のおかげで生きている。君主であろうと奴隸であろうと。)

このように、『シャー・ナーメ』に単数一人称代名詞の謙讓語としての *bande* が存在することから、恐らくパフラヴィー語といわゆる現代ペルシア語の間である沈黙の2世紀という長い空間に言わば、イスラームがイランに進入した後に、「神の創造物・神の奴隸」または単数一人称の謙讓語「私奴・小生」のようなニュアンスが加えられたと推測できる。

一方、後にイランの他の有名な文学作品として現れる作品においても、*bande* が多く用いられるが、いずれの場合でも『シャー・ナーメ』と全く同様に、「使用人；奴隸」の意味の方が圧倒的に多い。最初は「私奴・小生」の意味の *bande* は会話レベルで使用され、書き言葉においては使用頻度が会話レベルなど限られた状況にあったからであると考えられる。以下にイラン文学の他の有名な作品に現れる *bande* の事例をそれぞれから、まず「奴隸・召使い」それから謙讓語の「私奴・小生」の意味で用いられた事例を一つずつ引用する。

(以下の三つの作品を時代の順で並べており、作品自体を◆で示した。)

◆『Ghābūs nāme (カーブースの書)』より⁹⁾

- (1) har *bande*'ī ke 'ū rā bexarand va befrūšand 'āzād-tar az 'ān kasī bovad ke galū*bande* bovad. (yūsefi(版) 1999:55)

هر بندِه ای که او را بخردند و بفروشند آزادتر از آن کسی بود که گلوینده بود.

(筆者訳→買われたり、売られたりする奴隸の方が食欲の奴隸(私注: 飲食の虜になった人物)より自由である。)

- (2) Sahl goft: baqā-ye xodāvand bād, *manbande* hamīravam, ēūn bar sar-e šoql resam nācāre farmānhā ravān šavad, xodāvand bā *bande* nešāi konad ke kodām farmān bāyad ke pīš gīrad tā *bande* bedānd ke farmānī ke nabāyad gereft kodām bāšad va agar bāyad kard kodām bāšad? (yūsefi(版) 1999:169)

سهل گفت بقای خداوند باد من بندِه همی روم چون بر سر شغل رسم ناچاره فرمانها روان شود خداوند با بندِه نشانی کند
د که کدام فرمان باید که پیش گمرد تا بندِه بدانند که فرمانی که نباید گرفت کدام باشد و اگر باید کرد کدام باشد؟

(筆者訳→サハルは云った: 閣下に長寿がありますように。私奴が任務に就きますと、かならずやいろいろとご命令は発せられましょう。私奴はどの命令は守らねばならぬか、またどの命令は守る必要がないかを区別できるように、私奴にご指示くださりますか。)

◆ 『ルーミーの精神的マスナヴィー』より¹⁰⁾

- (1) har šarābi bande-ye 'in qaddo xad jomle mastān rā bovad bar 'ū hasad
 هر شرابی بنده این قد و خد جمله مستان را بود بر و حسد (Nicholson(版) 1971:226)

(筆者訳→すべてのワインが其方の姿と顔の奴隸で、酔っぱらいは皆其方(の美しい姿)を妬む)

- (2) goft tūti armaqān-e bande kū 'ānce didī 'ānce goftī bāzgu
 انچه دیدی آنچه گفتی باز گو گفت طوطی ارمنان بنده کو (Nicholson(版) 1971:101)

(筆者訳→鸚鵡(オウム)が云った、わたくしのお土産は? 観たものと云ったことを語っておくれ)

◆ 『ハーフィズの詩集』より¹¹⁾

- (1) bande-ye pīre-xarābātām ke lotfaš da'em 'ast
 var na lotf-e šeyxo zāhed gāh hasto gāh nīst (Salahshūr(版) 1998:57)

بنده پیر خراباتم که لطفش دائم است ورنه لطف شیخ و زاهد گاه هست و گاه نیست

(黒柳訳→私はいつも親切な酒場の老人の奴隸。さもなくば、長老や隠者の好意はあつたりなかつたり。)

- (2) var bāvarat nemikonad 'az bande 'in hadīs
 'az gofte-ye Kamāl dalilī biyāvaram (Salahshūr(版) 1998:255)

ور باورت نمیکند از بنده این حدیث از گفته کمال دلیلی بیآورم

(筆者訳→もしわがこの言葉を信じないのならば、小生はキャマールの台詞を証拠にお示しましょう。)

さて、以上のような長い歴史を背景に誕生した謙讓語としての bande はいかにヒンディー語・トルコ語などにも借用語として使用されているかを検討する前に、ここではまず、現代ペルシア語での bande とその複語語彙の意味をいくつかみてみよう。(本論の pp.11-14 では、有名な作品から bande の例文を引用したため、ここでは、bande とその複語語彙の引用にとどめたい。)

4.4. 「bande」を基に作成された現代ペルシア語の謙讓語

印欧語族的な性格をもつ band は、古代ペルシア語の bandaka から・パフラヴィー語の bandag/bandak に変化した後、現代ペルシア語の bande に新たに变化してきた。また、

本来の意味の「使用人；奴隸」に「(神の) 奴隸；小生；下僕；私奴」も加えられてきたことは前述のとおりである。この語彙をベースに現代ペルシア語に複合語彙がいくつか存在している。ここでは、本論の p.10 に紹介した現代ペルシア語の最も信頼度の高いいわゆる国語辞典『Loghat Nāmeḥ』による bande とその複語語彙を引用し、日本語訳を記す。(事例など詳細に関しては、Dekhoda(1957:318-20)を参照。)

- (1) bande: بنده → 使用人；召使；従順な召使；正直な使用人；完璧な人間；選択された人間、神の奴隸；人間一般；小生；私奴。
- (2) bande pazīrī: بنده پذیرى → 目下の人物を受け入れること；目下の人物に親切であること。
(私注：動詞 paziroftan 「پذیرفتن:受け入れる」の現在語幹で名詞化されたもの；召使・奴隸を受け入れること)
- (3) bande parvar: بنده پرور → 目下の人物に親切にする人。(私注：動詞 parvardan 「پرورتن:育てる；養うなど」；召使・奴隸を育てる/養う人の動名詞。)
- (4) bande parvardan: بنده پرورتن → 目下の人物に親切にする；ご親切から～してください。
(私注：動詞 parvardan 「育てる；養うなど」；召使・奴隸を育てる/養うことという直訳から。)
- (5) bande parvarī: بنده پرورى → 目下の人物に親切にすること；ご親切から～してくださいこと。
- (6) bande parvarīdan: بنده پروریدن → 上の(4)の bande parvardan と同様。
- (7) bande šodan: بنده شدن → 捕虜になる；奴隸になる；正しく従う。(私注：複語動詞～šodan 「～なる」の意から。)
- (8) bande farmānī: بنده فرمانى → 従順であること；相手の命令に従うこと。(私注：動詞 farmān bordan 「命令に従う；目上の人物の話に耳をする」から。)
- (9) bande kardan: بنده کردن → 従順にさせる；命令に従わせる。(私注：動詞 kardan 「する；行う」。)
- (10) bande gereftegī: بنده گرفتگى → 奴隸であること；奴隸状態。(私注：gereftegī は動詞 gereftan 「گرفتن:捕る；取る」が名詞化されたもの。)
- (11) bande gerefte: بنده گرفته → 囚人；投獄された。(私注：動詞 gereftan 「捕る；取る」から。)
- (12) bande gaştan: بنده گشتن → 上述の(7) bande šodan と同様。(私注：複語動詞～gaştan 「～になる」から。)
- (13) bande navāz: بنده نواز → 目下の人物に親切にする人，上述の(3) bande parvar と同様。
(私注：複語動詞 navāzeš kardan 「نوازش کردن:撫でる；愛撫する」の動名詞。)
- (14) bande navāzī: بنده نوازی → 目下の人物に親切にすること；ご親切から～してくださいこと。上述の(5) bande parvarī と同様。(私注：複語動詞 navāzeš kardan 「撫でる；愛撫する」の名詞化されたもの。)
- (15) bande vār: بنده وار → 名使のように；奴隸如く。(私注：接尾辞 vār 「～のような；～如く」の意から。)

- (16) bandī: بندى → 捕られた者；囚人；捕虜。(私注：本来、繩；紐で縛られた者の意から。)
- (17) bandixāne: بندىخانه → 監獄；刑務所。(私注：xāne「家；巢；家庭」，囚人/捕虜の家という直訳の意から。)
- (18) bandīdan: بنديدن → 動詞 bastan「بستن:縛る；結ぶ」と同様。
- (19) bandī šodan: بندى شدن → 捕虜になる；囚人になる。(私注：複語動詞～šodan「～なる」の意から。)
- (20) bandī kardan: بندى كردن → 捕虜にする；投獄する。(私注：複語動詞～kardan「～する」の意から。)

また、日本語での *bande* とその複語語彙の意味を見比べるには、『新ペルシア語大辞典』を参照した(黒柳 2002)。上述の語彙の中では、日常会話に使用頻度の高い語彙が以下のよう
に記されている。ほとんどの場合、謙讓語の意味で用いられている。

- (1) *bande* (بندۀ) → 「複数 بندگان (*bandegān*) 1) 奴隸；下僕 2) (謙讓語として) من (私注: *man*: 私)の代わりに用いる。私，小生 خدا ～ (私注: *bande-ye xodā*) 神の奴隸 (下僕) خودم خواهم آمد ～ (私注: *xodam xāham āmad*) 私は自身で参りましょう....」 p.233.
- (2) *bande xāne* (بندۀ خانه) → 「拙宅」 p.233. (私注: *xāne* は家)
- (3) *bande zāde* (بندۀ زاده) → 「愚息；わが子」 p.233. (私注: *zāde* は～生まれの)
- (4) *bande manzel* (بندۀ منزل) → 「拙宅」 p.233. (私注: *manzel* は家の丁寧語；オウチ)

上述辞典の語彙の他に複語動詞として *bande navāzī kardan* (بندۀ نوازی کردن/افرمودن) → ご親切に～して下さる；～なさる (私注: その直訳は奴隸/使用人を愛撫する；撫でるという意味である) が付け加えられる。

さて、印欧語族の古層の「**bhendh-* → *bandh-/band/bond*」に由来したとみられる謙讓語の素材敬語 *bande* は以下に説くように、現代ペルシア語の枠内のみでなく、ヒンディー語語・ウルドゥー語・トルコ語などにも幅広く同様な謙遜の意味「単数一人称・謙遜を表す複合語彙・神の奴隸」で使用されていることは興味深い。通説に従えば、現代ペルシア語からの借用語がヒンディー語・ウルドゥー語・トルコ語などに数多く存在していることが知られているが、以下に述べるように *bande*・*bande* の複合語もほぼ現代ペルシア語と同様な意味で用いられている。

4.5. 現代ペルシア語の「*bande*」とインド語派

簡潔に同じ語派、すなわちインド・イラン語派の現代ペルシア語とヒンディー語にみられる共通の語彙を以下の二つに分けられると言えよう。

(1) 同じ語派あるいは印欧語族の共通の語彙。

これには、本論の表3に挙げたサンスクリット語起源の現代ヒンディー語語彙と古期・中期イラン語派由来の現代ペルシア語語彙との間にみられる共通の語彙が挙げられる。繩・紐・枷の意味のサンスクリット語 bandh とパフラヴィー語・現代ペルシア語の band もこのような共通の語彙に属する。

(2) 現代ペルシア語から借用語としてヒンディー語に入った共通の語彙。

主にムガル帝国時代（ムガル帝国とも言う。1526年・1858年）に借用語として現代ペルシア語からヒンディー語に入った語彙である。

さて、サンスクリット語・中世/現代ペルシア語の間に数多くの印欧語族的な共通の語彙が存在するが、ここでは現代ペルシア語からヒンディー語に借用語として用いられる語彙に関して、述べる。語源が記されたヒンディー語辞典が一冊もあれば、数多くの現代ペルシア語・アラビア語の借用語をヒンディー語にみることができる。古賀(2005)あるいは、Mcgregor(1993)など。このような借用語には、尊敬・謙讓を表す語彙も含まれている。ここでは、アラビア語借用語がまたペルシア語を経由してヒンディー語に入ったということも注目すべきところである。ヒンディー語にみられるアラビア語借用語はペルシア語として借用されているのであり、語彙の音声もほとんどの場合、本来のアラビア語に似ているよりもペルシア語風音声になっている。日本語文献にヒンディー語の外来語語彙について、次のような指摘がある。

「中期ヒンディー語の音韻的特徴は、語末および音節末の短母音が脱落していったことである。語彙は、ムガル帝国の成立(1526)により、ペルシア語、および、ペルシア語を通して、アラビア語、トルコ語等の語彙が多く入り始めた。一方、ヒンドゥー教のバクティ(Bakhti)運動(私注:ヒンドゥー教の特定の聖者の創始による運動で、神へのバクティ(信愛)を強調する運動。バクティ運動では、多くのサンスクリット語語彙がヒンディー語に用いられるようになった。)が最高潮に達した結果、古典サンスクリット語からの語彙も多く復活した。」(町田1989:622)

それから、ヒンディー語の敬語表現¹²⁾に関して、例えば町田(1987:62-63)では、次のような例文が挙げられている。

「たとえば、āpkā nām<あなたの名前>の代わりに āpkā shubh nām<あなたの吉祥な名前=ご芳名>。ānā<来る>の代わりに tashrif lānā または padhārnā<いらっしゃる>など、尊敬語と謙讓語が対になったものとしては、āpkā daulatkhānā<あなたの富んだ家=お宅>と merā garībkhānā<わたくしの貧しい家=拙宅>などがあります。ただし、これらは使用しないと失礼になるというものではなく、多分に文体的です。」

しかし、このわずかな例文のなかでさえ、*tashrīf* (= *tašrīf*)・*daulatkhānā* (= *doulatxāne*)・*garībkhānā*(=*qarībxāne*)はペルシア語あるいは、ペルシア語経由のアラビア語であることは一目瞭然である。なぜならば、*tašrīf*: 光栄を与えること (アラビア語), *doulat*: 富;財産;政府;国家 (アラビア語) + *xāne*: 家 (ペルシア語), *garīb*: 妙な;変な;不思議な;見知らぬ (アラビア語) + *xāne*: 家 (ペルシア語) のように分析できるからである。

また「ヒンディー語の敬語は、町田和彦 (『ヒンディー語の敬語表現』『月刊言語』16(8), 大修館書店, 1987) や奈良毅の直話によれば、ほぼベンガル語と同じであるが、3人称代名詞では複数形が敬語表現の機能を兼ねる点が異なる。たとえば、3人称複数 *Ve*『彼ら』は文脈によって『あの方』または『あの方たち』をも表わし、これらに呼応する術語も複数形が用いられるという。また、敬語形の語彙はサンスクリット起源のほか、ペルシア語・アラビア語起源のものもあるという。ベンガル語やヒンディー語の敬語は、基本的には素材敬語のみからなり、素材が第2人称者と一致したときだけ、聞き手に対する敬意も表しうるシステムと考えられる。」という指摘がある(亀井 1989:327)。

上述のように、これらのペルシア語語彙のほとんどはムガル帝国時代にヒンディー語に借用されたと言われる。これに関して例えば次のような指摘がみられる。

「ペルシア語は、インドにおける 16 世紀初葉のムガル帝国創建以来、1833 年、イギリスの東インド会社の廃止にいたるまで、インドの雅言として通用した…」(足利 1977:41-42)

また、『ムガル帝国から英領インドへ』では「ペルシア文学とその影響」という部分で次のようなより詳しい記述がなされている(佐藤 1998: 193-195)。

「(前略) 宮廷語であるペルシア語文学の分野では、まずアミール・ホスロー以来のインド最高の詩人で、アクバルの桂冠詩人アブル・ファイズィと歴史家アブル・ファズルの兄弟が挙げられる。またペルシア語、アラビア語、サンスクリットに通暁していたシャー・ジャハーン帝の長男ダーラーは、スーフィーの哲学やムスリム聖者の伝記などを著し、ウパニシャッドなどを翻訳した大学者であり、ヒンドゥーイズムとイスラームを融合・折衷させようとした特異な思想家でもあった。アウラングゼーブ帝は文学活動には何ら関心を示さず、彼の時代の歴史を書くことに反対していたが、にもかかわらず彼の治世には多数の重要な歴史書が書かれている。ペルシア語はまた公用語となり、皇帝からラージプートの王たちなどへの命令書や両者の間の往復文書に使用され、さらにはラージプートの宮廷語にもなった。ムガルの宮廷に派遣されていたラージプート王国の大使たちは、本国との連絡文書にラージャスターン語とペルシア語をもちいて正確さを期し、微妙な機密を要する問題についてはラージャスターン語を使った。ペルシア語は軍事、司法、徴税関係の用語としても用いられ、次第に庶民の語彙のなかに入っていくことになった。なお、周知の

ように独立後のパキスタンの国語となったウルドゥー語は、デリー諸王朝の時代にペルシア語とアラビア語の語彙の影響によって発達したが、詩を中心とするウルドゥー文学がその盛期を迎えるのは北インド十八世紀中ごろである…」

現代ペルシア語・イラン文学に関して、数多くの著書・翻訳・辞典などを記述した黒柳氏も現代ペルシア語とヒンディー語の関係について次のように述べる。「(前略) 十三世紀初頭にペルシア語を母語としたトルコ系民族が北インドに独立ムスリム王朝樹立以降、当時のヒンディー系言語を母体にペルシア語と混交して成立した言語で、もっぱら話し言葉として用いられた。なぜならデリー諸王朝、ムガル朝末に至るまでイスラーム支配時代には数世紀以上にわたって公用語、学術書はペルシア語であった…」(黒柳 2002:ii)

さて、以上の引用部分に記されているように、現代ペルシア語の借用語がヒンディー語に大きな影響を及ぼしたことがわかる。すぐ以下に述べるが、現代ペルシア語の素材敬語がヒンディー語に借用語として用いられるよい例として **bande** とその複語語彙が挙げられるものの、町田氏はこれを指摘していない。日本で編集されたヒンディー語・日本語辞典が何冊かがあるが、語源の指摘もあり、極めて詳しく信頼度の高い古賀(2005)を参照した。(以下に指摘する言語を◆で示す。)

◆ヒンディー語

古賀(2005)(この辞典では現代ペルシア語からの借用語は現代ペルシア語表記で記されており、Persian は P とのみ記述されているが、以下 [P(ersian)] で示す。)

- (1) bandah(بندہ) [P(ersian)] 1) 下僕… 2) 従者 3) 信奉者 4) 奴隷 5) 自分のことを表す謙称；手前；小生；拙者；やつがれ。 p.909.
- (2) bandah zādah(زاده بندہ) [P(ersian)] 自分の息子のことをへり下って言う言い方；愚息；豚児 (私注：ペルシア語での直訳は「生まれ付きの奴隷」となる。) p.910.
- (3) bandah navāz(نواز بندہ) [P(ersian)] 1) 情け深い；慈悲深い… 2) 敬称のようにも用いられる… (私注：ペルシア語での直訳は「奴隷を愛撫する人」となる。) p.910.

あるいは、同じインド語派のウルドゥー語辞典にも数多くの現代ペルシア語語彙の借用語と共に **bande** も同様な謙讓語の意味として用いられる。(本来以上の引用部分(p.18)にもあったように、ベンガル語も酷似しているが、語源の指摘があり、信頼度の良い辞典・資料をみつけることができなかつたため、ここでは割愛する。)

◆ウルドゥー語

加賀(2005)(この辞典では現代ペルシア語からの借用語は現代ペルシア語表記で記されて

おり、PersianはPとのみ記述されているが、以下〔P(ersian)〕で示す。

- (1) bandagī (=bandagī: بندگی) [P(ersian)] 1) 奴隷たること 2) 謙譲の挨拶；辞去の挨拶，感謝の表現など。 p.234.
- (2) bandah(=banda: بنده) [P(ersian)] 奴隷，ムスリム信徒；私（謙譲語）…
bandah parvar(پرورنده)→弱者を助ける；主人；年長者（尊称）… bandah zādah(بنده زاده)→愚息（謙譲語）… bandah navāz(نوازنده)→（敬）父上，養ってくれる者…
bandegāne ‘ālī(بندهگان عالی)→高官に対する敬称。 pp.234-35.
- (3) bandī (=bande の女性形: بندی) 1) 信女 2) 女性が自分を指して言う謙譲語 3) 獄に捕らえられた女性 4) 船の出入港禁止；商品の通商禁止；閉店。 p.235.（私注：ウルドゥー語の女性形・謙譲語の bandī は，ヒンディー語では「腰元・侍女」を指すが，現代ペルシア語においては性別と関係なく囚人・奴隷・捕虜のみを指す。現代ペルシア語の bande は女性形の bandī に変化したとみられる。）

以上みたように，bande とその複合語彙を例に，ヒンディー語やウルドゥー語において，数多くの現代ペルシア語借用語のなかで，尊敬・謙遜の意を表す語彙も用いられている。bande とその複合語彙以外の語彙の詳細に関して稿を改めて論じることにするが，例として tašrīf（ご来訪: تشریف），marhūm（故人；死んだ人の尊称: مرحوم），hazrat（身分の高い人に対する尊称: حضرت）のような素材敬語を挙げておく（加賀 2005:590,1399）。

事実，同様な言語語派のヒンディー語・ウルドゥー語とは異なり，現代ペルシア語の敬語は全く異なる語族に属するチュルク語派にも着用語として用いられるのは興味深い。以下にまた bande とその複合語彙を例として，トルコ語を中心に調べることにする。

4.6. 現代ペルシア語の「bande」とチュルク語派

さて，語源が記述されたトルコ語，アゼルバイジャン語，ウズベク語，ウイグル語，カザフ語，チュルクメン語のようなチュルク語派に属する主要な言語の辞書を参照にすると，多くの現代ペルシア語借用語をみてとれる。その中には，現代ペルシア語の素材敬語も含まれている。トルコ語に関しては，このような借用語は主にオスマン帝国時代に借用されたと言われる。勝田（2002:i）によると，「オスマン帝国の版図が三大陸に拡大したのとはうらはらに，言語的にはアラビア語，ペルシア語からの膨大な語彙借用，統語上の影響を受ける結果になった。アラビア語，ペルシア語からの借用語を表記する場合，原語の固定した表記を忠実に守るか，オスマン語としての表記を採用するかで異なった。（中略）実際このような表記が併存し，教養ある知識人ほど原語アラビア語，ペルシア語の正書法に忠実であった…」ここでは，トルコ語・アラビア語・ペルシア語という語族の全く異なる三つの言語が波乱万丈の歴史を背景にいかにもダイナミックな言語接触を起しており，基層言語(substratum)・上層言語(superstratum)あるいは，傍層言語(adstratum)の役割を果

すかを検討することは非常に有意義あるテーマではあるが、紙面の都合により今後の課題にしたい。

いずれにせよ、現代ペルシア語からチュルク語派への借用語の数に関して、ウズベク語、トルコ語、アゼルバイジャン語、ウイグル語にはより多く、チュルクメン語、キルギス語、カザフ語にはより少ないとみられる。以下に言語別にそのような敬語の典型的な例として、本論の中心となる **bande** とその複語語彙を個々の言語辞典を基にまず西のトルコ語、それから以下の表 4 では、アゼルバイジャン語から東の（新疆）ウイグル語まで引用する。上に述べたヒンディー語・ウルドゥー語とは対照的に、これらの言語はチュルク語派であり、本来、印欧語族とは異なる語族に属する。ここでは、一語族から他語族への敬語の語彙・ニュアンスの移動をみることができる。

◆トルコ語

Redhaouse (1890) (トルコ語日本語辞典はいくつかあるが、語彙の数に乏しいため、水準が高く定評のあるトルコ語英語辞典を参照した。この辞典において、現代ペルシア語からの借用語は現代ペルシア語表記で記されており、Persian は P とのみ記述されているが、以下 [P(ersian)] で示す。)

- (1) bende(=bande: بندۀ) [P(ersian)] slave;servant; bondman.... bende niz→your humble servant. p.155.
- (2) bendeane(=bandexāne: بندۀ خانۀ) [P(ersian)] 1. my house(term of humility).
2. slave quarters. p.155.
- (3) bendezade(=bandezade: بندۀ زادۀ) [P(ersian)] 1.son of your slave(my son). 2. child of one's slave or servant. p.155.

さて、トルコ語以外の個々のチュルク語派の言語の場合には、それぞれの辞典を参照した限りでは、**bande** 自体が借用語として用いられるものの、なぜか **bande** の複合語彙は借用されていないとみられる。また **bande** の意味も「奴隷・神の奴隷・人間一般」にとどまり、謙遜の意が入っていないのは多に疑問である。ただし、上述のトルコ語の辞典とは対照的に個々の言語の辞典は語彙の数に乏しく、語源の指摘もないことから、詳細を記述した辞典とは言えない。以下の表 4 では、トルコ語以外の主要なチュルク語派の言語に借用語として使用される **bande** をそれぞれの言語の表記・意味(辞典のまま)・出典をまとめる。

表 4. 他の主要なチュルク語派諸語における *bande* の借用

言語	表記	意味	出典
◆アゼルバイジャン語	банде(bende)	slave; servant ¹³⁾	(Patrick 1994:39)
◆チュルクメン語	банде(bende)	servant, slave(of god), person, a poor person	(Allen 1999:72-73)
◆カザフ語	банде: به نده (bende)	神の子, 人; 奴隷 human being, humanity, servant of God	(飯沼 1994:113) (Karl 1994:46)
◆ウズベク語	banda	奴隷; 臣下	(小松 2004:9)
◆ウイグル語	باندە: به نده (bende)	召使 (きょう奴に仕えたイ スラム教徒)	(飯沼 1992:50)

以上のように、個々のチュルク語派の辞書を参照したうえで、現代ペルシア語を経由し、印欧語の *bande* が借用されていることがわかる。しかし、トルコ語のように、*bande* とその複合語が多く借用されており、現代ペルシア語同様に謙遜を示すのに対して、ウイグル語・ウズベク語・カザフ語・チュルクメン語のように、*bande* のみにとどまり、その意味もまた奴隷・神の奴隷・人間にとどまっている言語もある。しかし事実、個々のチュルク語派の言語辞典を参照すれば、*bande* のほか例として *kamīne/kemīne* (最小限; 小生: کمینه), *merhūm/merhūme* (死んだ人の尊称; 故人: مرحوم/مرحومه), *hazrat/hazret* (閣下; 陛下; 様: حضرت) などのような素材敬語が用いられている。これらの語彙は現代ペルシア語・アラビア語からの借用語であるが、ここでは *band* が話題の中心になっているため、詳細を省かざるを得ない。また、個々の言語により日常会話でのこれらの素材敬語の使用頻度が様々であるとは考えられるが、借用語として存在していることには変わりがない。本論ではこれらの語彙が借用されていることのみを個々の言語の辞書を基に記述するとどめた。

5. おわりに

本論では、現代ペルシア語の単数一人称の謙讓語 *bande* 「私奴; 下僕; 小生」に関して、中心的に述べた。この語彙を分析すると、「*band* (枷, 繩, 紐) + 関連を表す接尾辞 *e(h) → باند + .*」から構成されている。そのメイン部分である *band* は、現代英語を始め、表 3(p.5) でみたように数多くの古期・中期・新时期印欧語において、名詞として同様な意味の「枷, 繩, 紐」で用いられており、印欧祖語の **bhendh-* に由来すると考えられる。また表 3 に挙げたように、その動詞もサンスクリット語の *bandh-*・ゲルマン語の *bindan/bintan*・パフラヴィー語の *band-/bastan*・現代ペルシア語の *bastan*・ゴート語の *bindan*・現代英語の (to) *bind*

などを例に同じ語源に由来すると考えられる。これらの動詞も個々の印欧語において同様な意味の「縛る・結ぶ・締める」で使用される。さらに、band の複語語彙として、サンスクリット語の *bhṛtyah*(召使い；奴隷)・ゴート語の *bandi* (縛るもの、束縛、監禁、困われの身)・中世ペルシア語の *bandag*(使用人、召使)・現代英語の *bonds man/woman* (奴隷、使用人)、*bond maid* (未婚の女奴隷) などが挙げられる。同様に現代ペルシア語の *bande* も「奴隷；召使」の意味を指しつつ、ペルシアへのイスラーム進入後に「神の奴隷；人間一般」という意味が加えられたと思われる。そして本論で指摘したいいわゆる「沈黙の 2 世紀」の間に「縛られた者；奴隷；召使；神の奴隷」などの意味から単数一人称第名詞の謙譲語「私奴；小生；下僕」という新たなニュアンスが追加されたと考えられる。

他方、このような非常に長い歴史を背景に有する現代ペルシア語の単数一人称の謙譲語 *bande* は、いかに同様な印欧語のヒンディー語・ウルドゥー語や語族の全く異なるチュルク語派のいくつかの言語にまで借用語として用いられるのかに関して記した。

印欧語族の語彙の音声・意味変化・移動を考察する際、非常に長い歴史を背景に有する *bande* はおそらく最も適切な語彙のひとつの例であろう。いうまでもなく、「小生・下僕」など敬意・謙遜の意を表す借用語と「水・雪・帽子」などある物質のみを指す借用語の間には大きな差異がある。敬語と何らかの関係を有する語彙の背景には常に文化的・社会的な要素が存在しており、社会的・文化的な要素自体が借用されない限り、そのような語彙も借用されることはないと考えられる。

<参考文献>

- Allen, J. F. (ed.) 1999. *Turkmen-English Dictionary*. dp Dunwoody Press.
- Azarparand, Sohrab 2007. 「ペルシア語における敬語表現—素材敬語を中心に—」『言語社会』 No.2.438-456. 一橋大学大学院言語社会研究科。
- Bahrani, Ehsan.1990. *Farhange vāzehāye Avestā*. (アヴェスター語彙の辞典) vol.1. 1014.Tehran:Nashre Balkh.
- Barks, Coleman. 2007. *Rumi Bridge to The Soul*. Harpercollins Publishers Inc.
- Beatriz, G. J. (ed) 2003. *The Oxford Spanish Dictionary*. Oxford University Press. 92-3.
- Behzādī Behzād. 1993. *Farhange-Āzarbāijānī-Fārsī*. (アゼルバイジャン語・ペルシア語辞典) Tehran: Donyā.
- Dehkhoda Aliakbar. 1957. *Loghat Nameh*, no.2. Tehran:siroos. 318-321.
- Drosdowski, Günther. 2001. *Das Herkunftswörterbuch : Etymologie der deutschen Sprache*. Vol.7. Mannheim : Dudenverlag. 67,96,120.
- Farahvashī, Bahram. 1979. *Farhange Fārsī be Pahlavī*. (現代ペルシア語・パフラヴィー語辞典) Tehran
- Hans, Kurath. 1963. *Middle English Dictionary*. University of Michigan Press. 1039-44.
- Khalleghi-Motlagh, Jalal. 1988. *Shāhnameh*(The Book of Kings:王の書), New York : Bibliotheca Persica.
- Karl, A. K. 1994. *Kazakh (Qazaq)-English Dictionary*. dp Dunwoody Press. 46.
- 1996. *Uzbek-English Dictionary*. dp Dunwoody Press.
- MacKenzie, D. N. 1971. *A Concise Pahlavi Dictionary*. London:Oxford University Press. 17.
- McGregor, R. S. 1993. *The Oxford Hindi-English Dictionary*. Oxford University Press.
- Moneir Williams(ed.) 1963. *A Sanskrit-English Dictionary*. Motilal Banarsidass Publishers Private Limited. Delhi. 728, 751,976.
- Jahangiri, Nader. 2001. *A Sociolinguistic Study of Persian in Tehran*. 東京外国語大学

- アジア・アフリカ言語文化研究所。
 Nafisī, Sa'īd. 1935. *Shāh nāme-ye Ferdowsī*. Tehran: Berūkhīm. 3051.
 Nicholson, R.A. 1950. *Rūmī, Poet and Mystic*. London.
 ——— 1971. *Masnāvī-ye Ma'navī*. Tehran: Aliakbar-e 'Elmi. 101.
 Palmer, L. R. 1972. *Descriptive and Copmarative Linguistics*. Queen square, London :
 FABER.
 Patrick, A. O. (ed.) 1994. *Azerbaijani-English Dictionary*. dp. Dunwoody Press.
 Redhaouse, J. 1890. *Redhouse Turkish/Ottoman-English Dictionary*. Department of the
 American Board.
 Roger, D. Woodard (ed.) 2004. *The Cambridge Encyclopedia of The World's Ancient
 Languages*. Cambridge University Press. 764-776.
 Royce, M. 1977. *A Word-List of Manichaeian Middle Persian an Parthian*. Vol.1.
 Bibliothèqne Pahlavi, Tehran-liège. 27.
 Salahshūr, Mohammad. 1998. *Divān-e kāmel-e Hāfez-e Shīrāzī*. (ハーフィズ詩
 集). Tehran: 'Enteshārāt-e Ātīle-ye Honar.
 Soukhanov Anne H. (ed.) 1992. *The American Heritage Dictionary of The English Language*,
 Houghton Mefflin.
 Watkins, C. 1992. "Indo-European Roots." Soukhanov Anne H. (eds.) *The American
 Heritage Dictionary of The English Language*, Houghton Mefflin. 143, 144, 215, 2097.
 Windfuhr, G. (ed.) 2005. *The Iranian Languages and typology*. London: Curzon.
 Yarshater, Ehsan. 1957. "zabānhā va lahjehā-ye Irānī." Dehkhoda Aliakbar (ed.) *Loghat
 Nameh*, no.1. Tehran: siros. 9-25.
 Yūsefī, Gholamhosein. 1999. *Dars-e Zendeḡi, Gozīde-ye Qābūs nāme*. Tehran: Enteshārāt-e
 'Elmī.
 Zarrinkūb, Abdolhosein. 1951. *Do Qarn Sokūt*. (沈黙の二世紀) Tehran: Jāvīdān.
 ——— 1968. *Bā Kāravān-e Holleh*. Tehran: 'Enteshārāt-e 'elmī.
 足利悳氏 1977. 「ペルシア帝国」岩村忍 (編) 『世界の歴史』第9巻, 講談社 41-42。
 家村睦夫 1974 「歴史・比較言語学」田中春美 (編) 『言語学入門』大修館 186-216。
 池上二郎 (編) 1980 『言語の変化』講座言語第2巻, 大修館。
 池上岑夫 (編) 1996 『現代ポルトガル語辞典』白水社 152-153。
 池田廉 (編) 1983 『伊和中辞典』小学館, 169-70。
 伊吹武彦 (編) 1981 『仏和大辞典』白水社, 234-235。
 大江孝男 1989. 「アルタイ諸言語」亀井孝 (編) 『言語学大辞典』第1巻, 三省堂, 528-545。
 岡田恵美子 1987. 「ペルシア語の敬語表現」『月刊言語』16(8):64-65, 大修館書店。
 尾崎義 1990 『スウェーデン語辞典』大学書林, 28。
 小松格 2004 『ウズベク語辞典』大阪ウズベキスタンの会, 9。
 加賀谷寛 2005 『ウルドゥー語辞典』大学書林, 234-235。
 風間喜代三 1978 『言語学の誕生』岩波新書。
 ——— 1984 『印欧語の親族名称の研究』岩波書店。
 ——— 1989. 「インド語派」亀井孝 (編) 『言語学大辞典』第1巻, 三省堂, 703-709。
 勝田茂 2002 『オスマン語文法読本』大学書林。
 上岡弘二 1989a. 「イラン語派」亀井孝 (編) 『言語学大辞典』第1巻, 三省堂, 669-689。
 ——— 1989b. 「古代ペルシア語」亀井孝 (編) 『言語学大辞典』第1巻, 三省堂, 1708-1714。
 ——— (編) 2000. 「現代ペルシア語の音とカナ表記」『アジア・アフリカ言語文化研究 60号』
 169-235, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
 川島淳夫 (編) 1994 『ドイツ言語学辞典』紀伊国屋書店, 531-533。
 亀井孝 1989. 「敬語」亀井孝 (編) 『言語学大辞典』第1巻, 三省堂, 323-327。
 熊本裕 1989. 「アヴェスタ語」亀井孝 (編) 『言語学大辞典』第1巻, 三省堂, 122-132。
 黒柳恒男 (訳) 1969 『王書 - ペルシア英雄叙事詩 - 』平凡社。
 ——— (訳) 1976 『ハーフィズ詩集』平凡社, 55-56。
 ——— 1977 『ペルシア文芸思潮』近藤出版社。
 ——— 1980 『ペルシアの詩人たち』東京新聞出版局。
 ——— 2002a 『親ペルシア語大辞典』大学書林, 233。
 ——— 2002b 『アラビア語・ペルシア語・ウルドゥー語対照文法』大学書林。

- 古賀勝郎 (編)2005『ヒンディー語日本語辞典』大修館書店, 909-910.
 國原吉之助 1997『古典ラテン語辞典』大学書林。
 国松孝二 (編)1985『独和大辞典(GROSSES DEUTSCH-JAPANISCHES WÖRTERBUCH)』小学館, 226-227, 419。
 桜井和希 (共訳) 1972『ドイツ語学概論』白水社, 12-17。
 佐藤正哲(編)1998。「ムガル帝国から英領インドへ」榎山紘一 (編)『世界の歴史』第14巻, 中央公論社, 193-195。
 直野敦 1984『ルーマニア語辞典』大学書林, 23。
 高木昌史(共訳) 2006『ゲーテと詠む世界文学』青土社, 77-86。
 高津春繁 1954『印欧語比較文法』東京:岩波全書。
 田中春美 (編) 1988『現代言語学辞典』成美堂, 226。
 高津春繁 1950『比較言語学入門』岩波文庫。
 千種眞一 (編) 1997『ゴート語辞典』大学書林, 93。
 飯沼英三 1992『ウイグル語辞典』徳高書店, 155。
 一一1994『カザフ語辞典』ベスト社, 113。
 中島巖(訳)1999『基本梵英和辞典』東方出版, 262,263,265,277。
 縄田鉄男 1989。「ペルシア語」亀井孝 (編)『言語学大辞典』第3巻, 三省堂, 943-952。
 古川晴風 2005『ギリシャ語辞典』大学書林。
 堀井令以知 (編) 1994『語源大辞典』東京堂出版, 219-220。
 前田耕作 (共訳) 1986『インド・ヨーロッパ諸制度語彙集』言叢社刊, 346-53。
 前嶋信次 (訳)1966『アラビアン・ナイト』平凡社, 1。
 町田和彦 1987。「ヒンディー語の敬語表現」『月刊言語』8: 62-3。
 一一1989。「ヒンディー語」亀井孝 (編)『言語学大辞典』第3巻, 三省堂, 622。
 松田伊作 1989。「セム語族」亀井孝 (編)『言語学大辞典』第2巻, 三省堂, 465-69。
 吉枝聡子 2000「現代ペルシア語の敬語行動に関する社会言語学的研究ーテヘランの場合ー」博士論文, 東京外国語大学。

1) 本論では、引用する部分の音とローマ字表記はそのまま、筆者自身は記すペルシア語の長母音を「ā, ī, ū」、声門破裂音の[ʔ]を「ʔ」、口蓋垂音の[q]を「q」、後部歯茎摩擦音の[ʃ]を「ʃ」、後部歯茎摩擦音の[ʒ]を「ʒ」、軟口蓋摩擦音の[x]を「x」そして硬口蓋破裂音の[ç]を「ç」で示す。また、現代ペルシア語に存在する二つの半母音 /y/, /w/ を二重母音になる際、「ey」, 「ow」で示す。促音は、二重子音で示すが、音節境界が同一子音の間にある際、促音にならないため、二重子音の間に「.」を記して示す。それから、エザーフェとよばれる現代ペルシア語の所有格を子音で終わる語彙の後で「-e」, 母音で終わる語彙の後で「-ye」で表記する。現代ペルシア語の音・カナ表記の詳細に関しては、上岡(2000)を参照。

2) 詳細については、以下を参照。

- ① 高津春繁 1954『印欧語比較文法』東京: 岩波全書。
 - ② 腹部四郎 (編) 1971『言語の系統と歴史』東京: 岩波書店。
 - ③ Szemerényi. 1985. *Recent developments in Indo-European linguistics. Transactions of Philosophical Society*(London).
 - ④ Cardona, G. Hoeningwald, H. M and A. Senn.1970. *Indo-European and Indo-Europeans*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- 3) インド・イラン語派の概略をみるには以下の文献を参照。
- ① Sims-Williams .N (ed.) 2002. *Indo-Iranian Languages and Peoples*. Proceedings of the British Academy 116. Oxford:Oxford University Press.
 - ② Cardona, G and Emmerick, R. E. 1974. Indo-Iranian Languages. In *Encyclopaedia Britannica*, 15th ed. 9.438-457. Chicago: encyclopaedia Britannica, Inc.
 - ③ 風間喜代三 1989。「インド・イラン語派」亀井孝(編)『言語学大辞典』第1巻, 三省堂, 709-12.
- 4) 「(Appendix)→bhendh-. (Important derivatives are bind, bend, band, bond, and bundle.) To bind. 1.a. BIND;WOODBINE, from Old English *bindan*, to bind; b. BINDLESTIFE, from Old High German *binten*, to bind. Both a and b from Germanic *bindan*. 2. BANDANNA, from Sanskrit *bandhati*, he ties. 3. O-grade from *bhondh-*: a. BEND, RIBBON, from Old English *bend*, band, and Old French *bende*, band; b. BEND,

from Old English *bendan*, to bend; c. BAND, BOND, from Old Norse *band*, band, fetter; d. BAND, from Old French *bande*, bond, tie, link. a,b,c, and d all from Germanic *band-*.
 4. Suffixed from *bhond-ō*: BUND; (CUMMERBUND), from Old Iranian *banda*: band, fetter. 5. Zero-grade from *bhpdh-*: a. BUND, from Middle High German *bunt*, league; b. BUNDLE, from Middle Dutch *bonde*, sheaf of papers, bundle. Both a and b from Germanic *bund-*...」 Watkins 1992:2097.

- 5) パフラヴィー語「bandag/bandak」→現代ペルシア語「bande」のような音声学的な変化が両言語間に数多くみられる。例えば, *vanafšag*→*banafše*(スマレ, 女性名にも用いる), *nāmag*→*nāme*(手紙), *pāyag*→*pāye*(机・椅子などの脚), *vahānag/bahānag*→*bahāne*(言い訳, 口実), *bādag*→*bāde*(葡萄酒)など。ちなみに, 日本語の葡萄の語根に関して, 上岡(1989:687-88)による次のように指摘がある。「シルクロードを経由して中国語に入ったイラン語については, 改訂の必要がかねがねいわれているもの, Berthold Laufer, *Sino-Iranica, Chinese Contributions to the History of Civilization in Ancient Iran with Special Reference to the History of Cultivated Plants and Products*(The Field Museum of Natural History, Chicago, 1919)が便利である。なお, 日本語にまで流入したイラン語で, 容易にそれと分かるものに, たとえば, イチヂク(無花課): 中期および現代ペルシア語 *anjir* (私注: ロシア語で *injir*(инжир)という), ブドウ(蒲桃または葡萄): 中期ペルシア語 *bādag*, 現代ペルシア語 *bāde*「ブドウ酒」などがある。」上岡氏の記述に付言すると, 恐らく現代ペルシア語の *bāde* はまず, 同じイラン系の言語であるタジク語(長母音の *ā* を有しないことから)では「boda」に変化してから, シルクロードを通して中国語では「pūtao」、韓国語では「podo」そして日本語では「budō:ブドウ」になっており, 次第に意味が「ブドウ酒」から「ブドウ」に変化してきたのであろうと思われる。実は『言語学大辞典』の説の他, 堀井による説もある。「葡萄:ブドウ科の植物。中国語ブータオ。西域から渡来した。ギリシア語 *bótrus* から葡萄の二字で音訳したものか。」(堀井 1994:219-20)。この説の自信のなさとはともかく, 音声学的にみて, ペルシア語語源の可能性がより高いのではないだろうか。
- 6) 前田(1986:346-353)『インド=ヨーロッパ諸制度語彙集』によると, インド・ヨーロッパ諸語においては, 捕虜・奴隷・他所者を指す語彙は他にもある。「集団の内部で生まれた自由人に対して, 他所者(異人)(ギリシア語 *xénos*, ラテン語 *hostis*) が対置される。後者は, 私の客(ギリシア語 *xénos*, ラテン語 *hospes*) にもなるし, また戦争においてこれを捕虜とした場合は私の奴隷(ギリシア語 *aikhmálotos*, ラテン語 *captivus*) ともなる。異人である以上, 奴隷は必然的にインド=ヨーロッパ諸語で, そして現代語においてさえ, 外来語(ギリシア語 *doúlos*, ラテン語 *seruus*) もしくは異民族を指す名詞(フランス語 *esclave*<*Slave*) によって示されている。」エミール・バンヴェニストによって書かれたこの作品では(「前略」)以上の合成語はいずれも捕虜を捕えた様子によって描かれている。だが, それを示す語は他にもある。その例として, ここでは次のような語をあげておかなければならない。たとえば, 古代イラン語の *banda(ka)* やサンスクリット語の *bandhin* である。これらは捕虜を《縛られた》者として規定している...」という簡潔な記述がある前田(1986:348)。
- 7) これに関しては, 縄田(1989:951)による次のような記述がある。「イスラーム文化史上, イラン系学者, たとえば, イブン・シーナ(アヴィセンナ: Ibn Sīnā, 980-1038), ビールニー(al-Bīrūnī), ガザーリー(al-Ghazālī)などが, 科学, 哲学, 神学などの諸分野における著書をアラビア語で書いたことは, イスラーム文化圏におけるアラビア語の学術語, 文化語, あるいは, 国際語としての地位を如実に物語るものである。ペルシア語もまたかつて, このアラビア語に次ぐ重要な位置をもち, 今日より, その使用地域も広範にわたっていた。中央アジアはもとより, インド・イスラーム諸王朝の公用語でもあった。特に, インド・ムガル朝(1525~1857)の宮廷語, 公用語としても用いられてきたので, この地域の歴史, 文化の研究にとっては, ペルシア語の知識は不可欠である。」
- 8) 『シャー・ナーメ』は出版により, 若干の差があるにせよ, *bande* の意味に関しては, 「使用人・奴隷・目下の人物・神の創造物」の意味で用いられた方が単数一人称の謙讓語「下僕・小生・わたくし」の意味より圧倒的に多いことには, いずれの場合も変わりがない。また, 『シャー・ナーメ』において, *bande* の複数形である *bandegān* という語彙も数多く用いられているが, いずれの場合も「使用人; 目下の人物; 奴隷・神の創造物」を指している。

- 9) イスラーム以降のイランにおいて散文による最も重要且つ古い文学作品言わば、庭訓書の一つである。ほぼ 925 年前 (1055 年ごろ) 書かれたとみられる『Qābūs nāme: قابوسنامه』(カーブースの書)。詳細に関して、黒柳(1980:257-291)を参照。
- 10) ルーミーは現在アフガニスタンのバルフ (Balkh: بلخ) で生まれ、詩をペルシア語で詠み、現代トルコで没 (1207~1273)。生涯の大半をルーム (小アジア) で過ごしたため、一般にルーミー (ルームの人) という名で知られているが、イランにおいてはモウラーナー (われらの師)・モウラヴィーと呼ばれる。イラン文学史上最高の神秘主義人であるとされる。『シヤムセ・タブリーズィー詩集』、『精神的マスナヴィー』、『ルーミー語録』などが彼の作品として有名である。詳細に関して、黒柳(1980:188-220)や Nicholson (1950)を参照。
 ちなみに、1996 年 Coleman Barks による流麗な翻訳をきっかけにルーミーの詩はアメリカを中心に欧米に著しいスピードで注目を浴びている。ルーミーの誕生 800 年週と共に、UNESCO は 2007 年をルーミーの年 (The International Year of Rumi) に 名称することや、インターネットで Rumi/Rūmī で検索するとほぼ 600 万以上も結果が出るなどからもその人気ぶりをみてとれる。これからさらに人気をよぶだろうと考えられる詩人である。英語訳はいくつも存在するが、Barks による翻訳をみるには Barks(2007)を参照。
- 11) イランでは、ハーフィズ(1326 頃~1390)は知識人のみでなく、一般大衆からも最も愛唱されている詩人であると言われる。神秘主義抒情詩人であるハーフィズの詩集はあの名高いドイツのゲーテの『西東詩篇』に大きな影響を与えたことが有名である。詳細に関して、黒柳(1980:45-75)や高木 (2006:77-86)を参照。
- 12) ヒンディー語の敬語の詳細に関して、以下の文献を参照。
 ① Mehrotra, N. R. 1970. *Terms of Kinship, Modes of Address and Reference in Hindi*.
 ② Misra, K. S. 1977. *Terms of Address and Second Person Pronominal usage in Hindi*.
- 13) ただし、アゼルバイジャン語・ペルシア語辞典では、「banda: 奴隸；人間一般；こちら (謙讓語)」と記されている(Behzādī 1993:328)。